

平城京左京二条二坊十一坪 の調査

— 第563次・第571次

1 第563次調査

はじめに

本調査は、奈良市法華寺町の共同住宅の建設にともなう事前調査である。南北33m、東西10mの調査区を設定した(図239)。調査面積は330㎡。調査区隣接地の既往の調査では、奈良時代の掘立柱建物を検出しており、本調査区では、それらに続く建物跡の検出が想定された。

調査は2016年1月12日に開始し、3月31日に終了した。

周辺の調査成果

本調査区の東、西、北に位置する第279次、第282-16次、第289次調査では、奈良時代の大型の東西棟掘立柱建物3棟(正殿SB6950と後殿SB6990、SB6994)と、南北棟掘立柱建物2棟(東脇殿SB6957、西脇殿SB7330)を検出し(『年報1997-Ⅲ』、『年報1998-Ⅲ』)、コの字型もしくは口の字型の建物配置が想定されている。また東に隣接する第279次調査区の北部からは施釉瓦が集中的に出土しており、平城宮東院と坪の西北隅を接する位置にあることから、宮外ではあるものの官衙的な性格を持つ建物群として評価されてきた。

基本層序

調査地の基本層序は、表土(10~20cm)、耕作土(約10cm)、床土(約25cm)、灰褐色砂質土(約15cm)、礫を含む遺物包含層(約10cm)、黒褐色砂質土(整地土)、明黄褐色粗砂(洪水砂)、灰白色シルト、灰白色粘土、黄灰色粘土、明オリブ灰色シルト~粘土、青灰色砂(以上地山)と続く。多くの遺構を、整地土である黒褐色砂質土上面で検出した(標高約60.3m)。一部の遺構は、整地土直下の地山面で確認している(標高約60.1m)。

検出遺構

本調査で検出した主な遺構は、建物8棟、南北塀2条、東西塀5条、単廊1条(以上はいずれも掘立柱の構造をもつ)、南北溝1条である(図241)。これらは遺構の検出面および遺構の重複関係から、少なくとも5時期に分けることができる。奈良時代の遺構を中心に以下で時期別に詳述する。

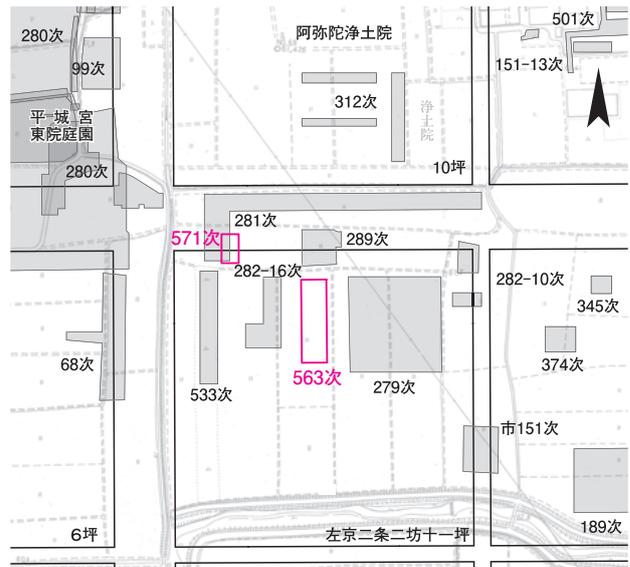


図239 第563次・第571次調査区位置図 1:3000

① 1期の遺構(整地土の下面)

南北溝SD11035 整地土の下で検出した調査区西辺を縦断する南北素掘溝(図240)。幅約0.4m、深さ約0.3mで、断面は逆台形状を呈する。埋土上層は比較的均質な黒色粘土、下層は粘土ブロック混じりのシルトで、埋土にはほとんど遺物が入らない。帯水した形跡がなく、比較的短時間で埋められたと推定できる。底面の標高は北端で約59.8m、南端で約59.6mで、北から南へ傾斜する。

② 2期の遺構(奈良時代前半)

東西棟建物SB6950 調査区の南部で検出した東西棟建物。第279次調査区で検出した東妻から西方に続く桁行2間分を検出した。柱間は身舎、廂柱ともに約3.0m(10尺)である。検出した東側の柱間の中軸は、坪の南北中軸とほぼ一致しており(『年報1998-Ⅲ』)、この中軸で東西対称と考えると、桁行7間、梁行4間となる。



図240 南北溝SD11035完掘状況(北から)

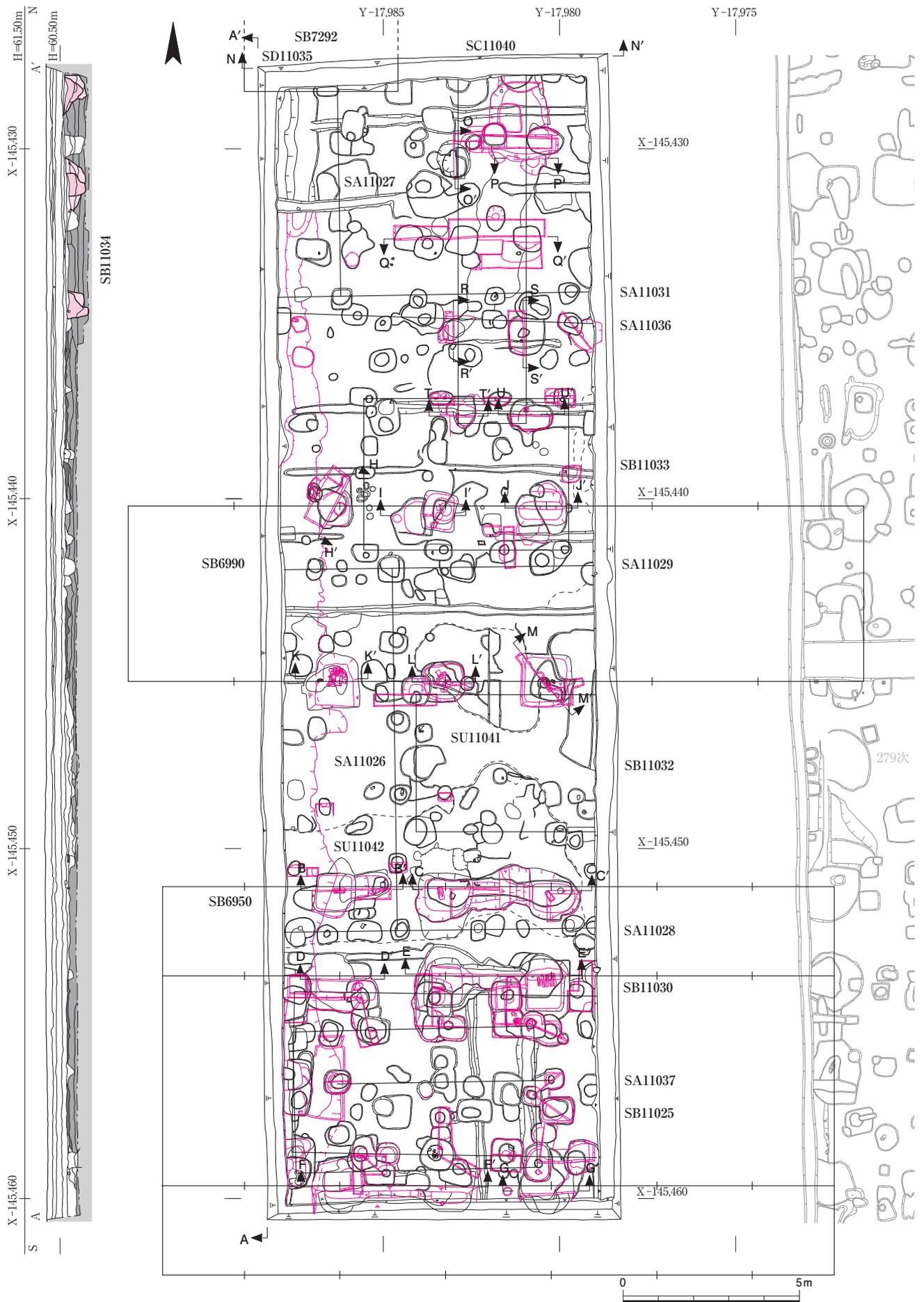


図241 第563次調査遺構図・西壁土層図 1 : 150

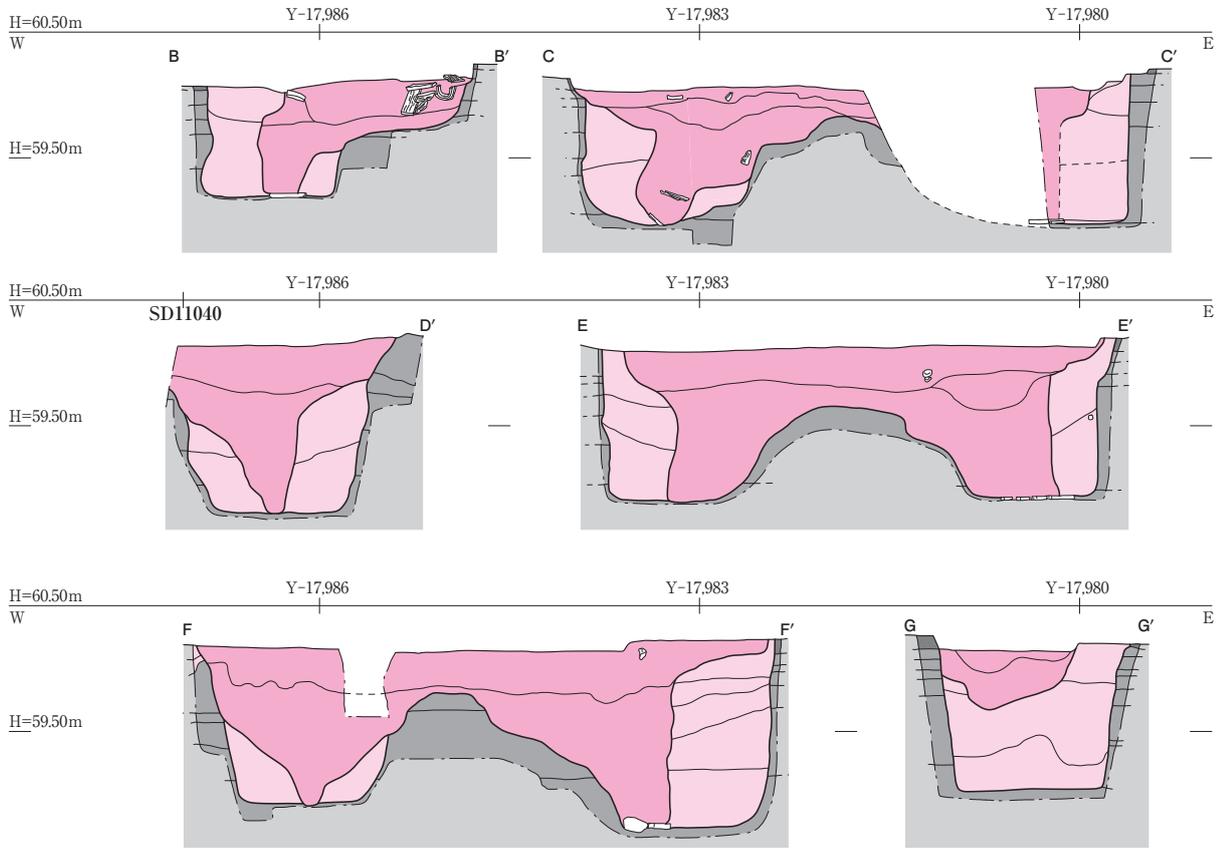


图242 SB6950柱穴断面图 1 : 60

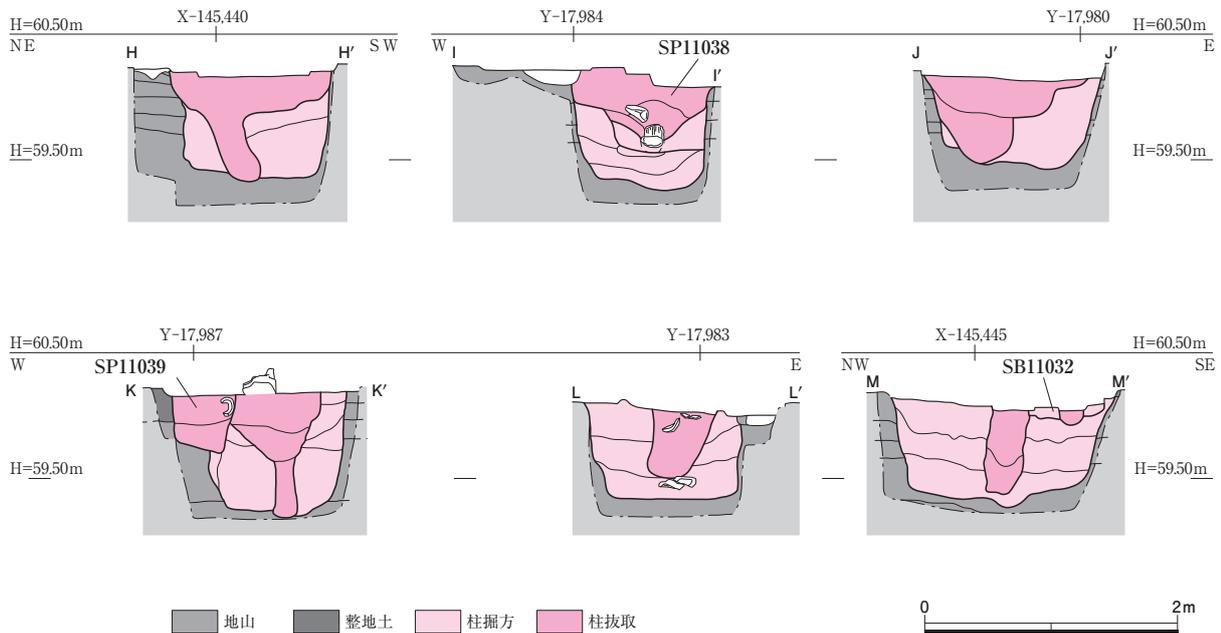


图243 SB6990柱穴断面图 1 : 60

桁行中央3間は10尺等間、身舎梁行2間は10尺等間で、廂の出は8尺である。桁行の両脇各2間は合わせて16尺であり、柱間寸法を完数尺と考えると、8尺等間、9尺・7尺、10尺・6尺など数通りの組み合わせが想定できる。8尺等間であれば、隅の間は桁行・梁行とも8尺となり、身舎桁行5間、梁行2間の四面廂建物と考えられる。しかしながら、西に続くもう1間分の柱穴が他の柱筋と同じ規模であれば、その一部が調査区内で確認されるはずであり、可能性が低い。後2者であれば、身舎桁行7間、梁行2間の南北二面廂建物と考えられる。

柱掘方は、身舎柱が約1.4m四方、深さ1.0~1.2m、廂柱が1.1~1.4m四方、深さ1.1~1.5mで、規模は身舎柱の柱穴が全体に大きい(図242)。

柱はいずれも抜き取られていたが、底面に長さ約33~36cm、幅約8~17cm、厚さ約2~7cmの礎板が残るものが多かった。北面廂の柱および身舎の北側柱筋は中央間の2基の抜取穴が連続し、身舎の南側柱筋は西脇間の2基の抜取穴が連結しており(図245)、建物の構造および解体の工程を考える上で興味深い。

廂柱、身舎柱の抜取穴から共に軒丸瓦6311A・B、軒丸瓦6664F・D(瓦編年Ⅱ-1期)が出土した。

3期のSB11025、4期のSB11030と重複し、これよりも古い。

東西棟建物SB6990 調査区の中央部で検出した東西棟建物。第279次で検出したSB6990の西側に続く桁行2間分を検出した。柱間寸法は約3.0m(10尺)で、SB6950の柱筋と一致する。SB6950と同様に坪の南北中軸で左右対称と考え、桁行7間、梁行2間の東西棟建物と考えられ、調査区外の西方へ続く想定できる。桁行総長は約21m(70尺)の東西棟に復元できる。

柱掘方の大きさは一定ではなく、約1.0~1.5m四方、深さ約0.8~1.0mである(図243)。柱掘方の底面からは礎板、瓦片等が出土した。西南の柱穴では、礎板として底面に長さ約37~54cm、幅約7~18cm、厚さ約1cmの板材を8枚重ねていた。1枚目と2枚目の板には柱のあたりと考えられる円形の圧痕があり、柱の直径は32cmに復元できる(図246・250)。

柱抜取穴から軒丸瓦6311A・B、軒丸瓦6664D(瓦編年Ⅱ-1期)が出土した。

東西棟建物SB11034 調査区北部の西壁で検出した柱

穴列。柱筋が第279次、第282-16次で検出したSB6994の柱筋と概ね一致する。既往の調査では桁行15間の東西棟建物が復元されていたが、本調査区の想定位置の平面では検出していない。そのため、別の東西棟建物となり、第282-16次のSB6994の名称をSB11034に改める。

単廊SC11040 調査区北部で検出した、桁行4間以上、梁行1間の単廊。左京二条二坊十一坪の南北中軸に位置する。桁行の柱間は8尺で、梁行の柱間は7尺である。柱掘方の深さは西側柱列の南から2番目の柱穴のみ約0.2mと浅く、他は約0.4~0.8mである(図244)。南端の柱穴とSB6990の北側柱筋の間隔は約2.4mである。後述するように、SB6994が未検出で、坪の南北中軸にのることから、大型建物群に関係する施設と考える。

③3期の遺構

東西棟建物SB11025 調査区南部で検出した桁行3間、梁行2間の東西棟建物。建物の軸線は北で西にふれる。桁行の柱間は約2.4m(8尺)、柱掘方は約0.8m四方で、深さ約0.3~0.5mである。4期のSB11030と重複し、これよりも古い。

南北塀SA11026 調査区の中央部で検出した南北塀。全長5間で柱間は約2.1m(7尺)。軸線は北で西にふれる。北端で東西塀SA11029に、南端で東西塀SA11028に取り付く。

東西塀SA11028 調査区の南部で検出した東西塀。長さは3間以上で、柱間は約2.4m(8尺)。柱筋は西で南にふれる。

東西塀SA11029 調査区の中央部で検出した東西塀。長さは3間以上で、柱間は約2.1m(7尺)。柱筋は西で南にふれる。

④4期の遺構

東西棟建物SB11030 調査区南辺部で検出した、梁行2間の東西棟建物。西妻から4間分検出し、調査区外の東へ続く。第279次調査区では柱筋が揃う柱穴を検出しておらず、桁行全長5間もしくは6間と考えられる。柱間は桁行約2.1m(7尺)、梁行約2.8m(8尺)。建物の軸線は東で南にふれる。柱掘方は長方形を呈し、妻柱のみ浅く深さは約0.2m、他は深さ約0.3~0.5mである。比較的深い柱掘方には礎盤石を入れており、柱の高さを調節したものと考えられる。

柱抜取穴から軒平瓦6682C(瓦編年Ⅱ-2期)が出土した。

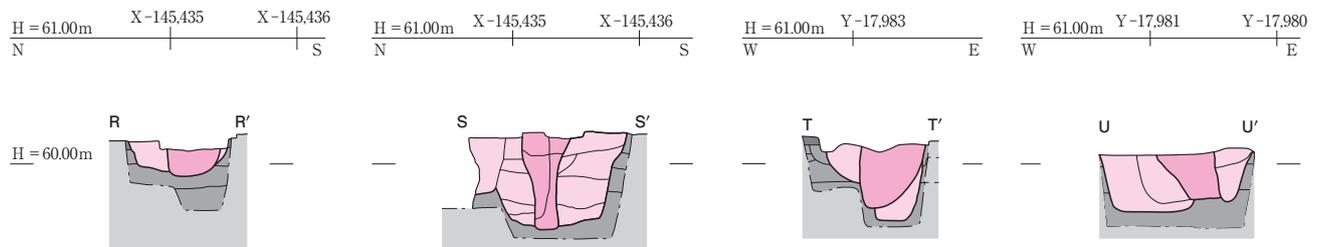
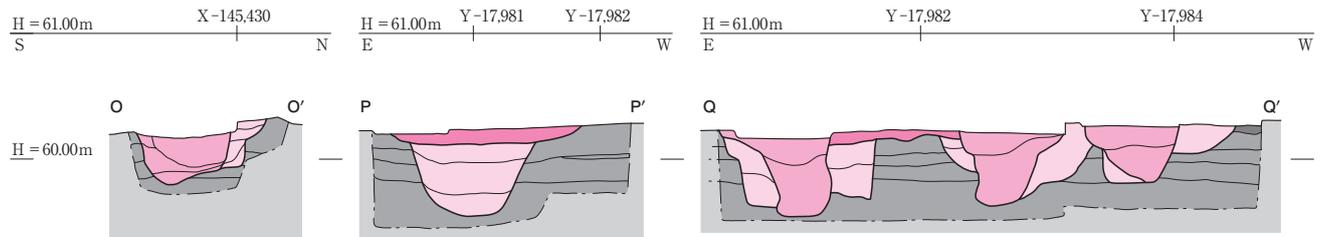
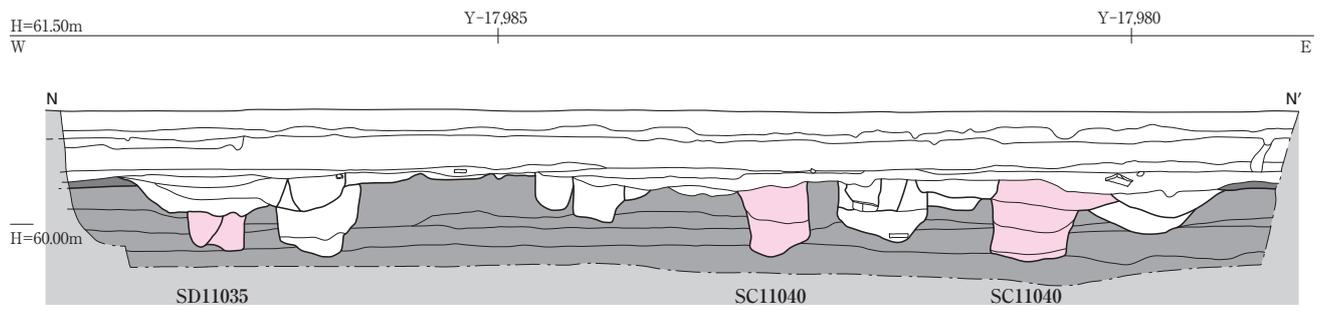


図244 北壁およびSC11040柱穴断面図 1 : 60



図245 SB6950廂柱の連結抜取穴（北西から）



図246 SB6990南西隅柱穴礎板（南東から）

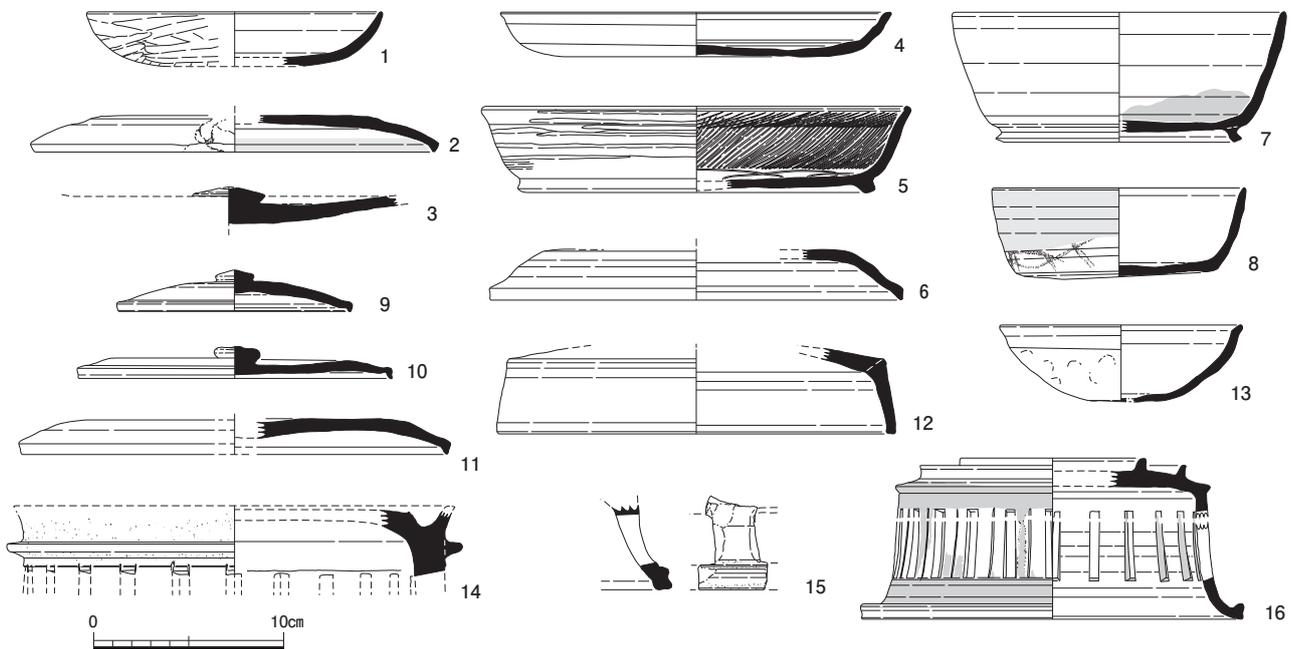


図247 第563次調査出土土器・土製品 1 : 4

東西塀SA11036 調査区北部で検出した東西塀。長さは3間以上、柱間は約2.1m（7尺）。柱筋は東で南にふれる。5期以降の東西塀SA11031と重複し、これよりも古い。

⑤5期の遺構

南北塀SA11027 調査区の北部で検出した南北塀。長さ3間以上で調査区外の北へと続く。柱間は約2.1m（7尺）。柱筋は北で西にふれる。南端は東西塀SA11031に取り付く。

東西塀SA11031 調査区北部で検出した東西塀。長さ3間以上で、柱間は約2.1m（7尺）。柱筋は西で南にふれる。

柱の抜取穴からは軒丸瓦6225C（瓦編年Ⅲ期）の瓦が出土した。

⑥時期不明遺構

東西棟建物SB11032 東西棟建物SB6990と重複し、これより新しいことから、3期以降と推定される。調査区中央部で検出した桁行3間以上、梁行2間の東西棟建物。柱間は桁行、梁行ともに約2.1m（7尺）で、調査区外の東へ続く。

東西棟建物SB11033 東西塀SA11029と重複し、これより新しいことから、4期以降と推定される。調査区中央部で検出した桁行3間、梁行2間の東西棟建物。柱間

は桁行、梁行ともに約1.8m（6尺）。

南北棟建物SB7292 調査区北辺部で南妻を検出した南北棟建物。第289次調査区から続き、全体の規模は桁行5間、梁行2間で柱間は約2.1m（7尺）である。第289次調査ではI期（奈良時代前半）と考えられている。

東西塀SA11037 調査区南部で検出した東西塀。長さは2間以上で、柱間は約3.0m（10尺）。柱筋がSB6950と揃うため、東柱の可能性もあるが、抜取穴から軒丸瓦6308I（瓦編年Ⅱ-2期）が出土したため、SB6950より新しい東西塀と考える。

遺物溜SU11041 調査区中央部で検出した遺物溜。東西棟建物SB6990と重複し、これより新しい。

遺物溜SU11042 調査区中央部で検出した遺物溜。東西棟建物SB11032と重複し、これより新しい。

（浦 蓉子）

出土遺物

遺物は建物の柱穴を中心に、遺物溜、包含層などから出土した。

土器・土製品 整理用コンテナ16箱分の土器、土製品が出土した。奈良時代の土器がそのほとんどを占める。全体的に須恵器が多い傾向がある。また、転用硯と漆附着土器も目立ち、それぞれ整理用コンテナ1箱分ほど出土している。転用硯は調査区の北寄り、および東西棟建



図248 第563次調査出土軒瓦 1 : 4

表41 第563次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦		軒平瓦		その他	
型式	種	点数	型式	種	点数
6133	?	1	6644	A	1
6144	A	1	6664	D	4
6225	C	1		F	3
	F	1		?	2
6281	Ba	1	6667	C	1
6304	A	2	6682	A	1
	?	1		B	1
6308	I	5		C	3
6311	Aa	3		D	1
	A	5	6691	A	1
	Ba	4	型式不明(奈良)		3
	B	1	時代不明		2
6313	Aa	1			
型式不明(奈良)		16			
時代不明		5			
軒丸瓦計		48	軒平瓦計		23
			その他計		31
	丸瓦		平瓦		磚
重量	108.956kg		378.78kg		2.335kg
凝灰岩					0
点数	1223		5613		4
					0

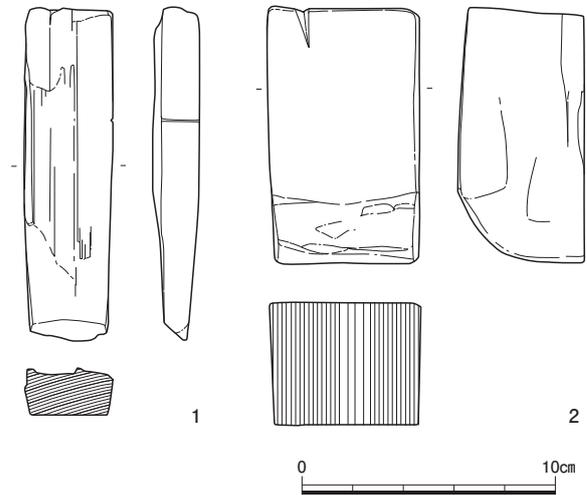


図249 第563次調査出土木器 1 : 3

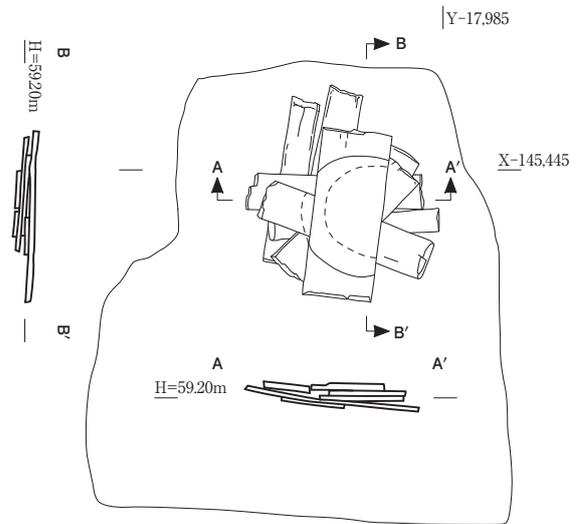


図250 SB6990礎板出土状況 1 : 20

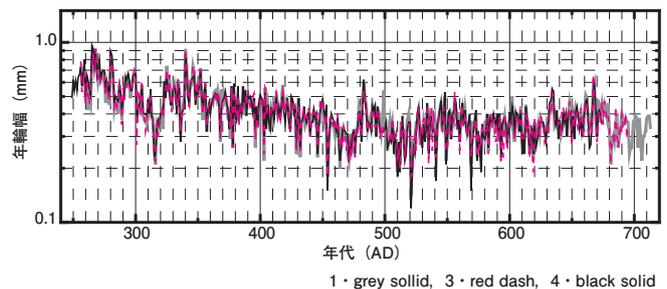


図251 SB6990礎板の年輪曲線照合状況

物SB6950以北の遺物溜や包含層で多く出土している。また、漆附着土器は調査区全域から出土している。

ここでは建物の柱穴、遺物溜などから出土した土器を中心に述べる(図247)。1はSB11033出土。土師器皿A。器表面の残存状況は不良だが、c0手法で、奈良時代後半のものと思われる。2は須恵器杯B蓋。頂部外面に成形時ないし乾燥時の失敗を補修する粘土痕跡が残る。SB11032出土。3も須恵器蓋。SB11034出土。4～6は東西棟建物SB6990の柱抜取穴出土。4は須恵器皿C。底部から口縁部の立ち上がり丸みをもつ。底部外面はヘラ切りからナデ調整のみで、ケズリを施さない。5は土師器皿B。外面は丁寧に磨きを施し、内面にも細かい二段放射状暗文を施す。6は須恵器蓋。これら4～6の帰属時期は奈良時代前半。7はSB11025の柱掘方から出土した須恵器杯B。底部内面に墨痕が残る。8は包含層から出土した須恵器杯A。9～12は遺物溜SU11042出土。SU11042からは、特に須恵器杯蓋の転用硯(9～11)が多く出土した。12は大型の壺蓋。SU11042と包含層の2片が接合した。13は遺物溜SU11041出土。土師器碗C。14～16は陶硯。いずれも圈足円面硯。14は硯部片。灰青白色の砂が多い胎土で、正置焼成。15は脚部片。砂粒が少ない精良な胎土で、正置焼成。16はSA11029と包含層から出土した。陸部が海部より高い形態。やや砂粒と黒色粒子を含む灰白色の胎土で、外堤部から脚部にかけて薄緑色の自然釉が厚くかかる。(神野 恵)

瓦 類 軒瓦の出土は柱穴からが多く、施釉瓦は遺物包含層からの出土が多い。出土した瓦は表41に示した。各型式の出土量をみると、6311A・B-6664D・F(図248-1)および6308I-6682A～Dの組み合わせが成り立つ(図248-2)。前者が平城瓦編年Ⅱ-1期、後者がⅡ-2期に位置づけられ、建物遺構はこの時期が中心となろう。2つの組み合わせはSB6990以南に分布する。

このほか、施釉の平瓦、鬘斗瓦が多く出土している。釉は緑釉のほか二彩もみられる。出土地はSA11028以北に限られる。本調査区の東に位置する第279次調査では、施釉瓦の出土が集中するSB6994をその使用建物と想定したが、今回の調査ではSB6994は検出されなかった。本調査区では施釉瓦を使用した建物を特定することは困難であるが、出土状況から本調査区の北半のいずれかの建物に施釉瓦を使用した可能性が高い。

軒瓦の主要な組み合わせや施釉瓦が出土する状況は、第279次調査、本調査区の西に位置する第533次調査と一致しており、同一坪内にある建物群が一連のものであることがあきらかになった。(今井晃樹)

木器・大型部材 木器は柱穴などから楔や燃えさし、棒状木端が出土した(図249)。1は楔。表面が大きく割れ、両面を削り先端を細く削る。長13.3cm、幅4.5cm、厚1.9cm。2は不明部材。SB6950の身舎柱の抜取穴から出土。角に面取りを施し、刀子などで加工し丁寧に湾曲部分を作り出す。長10.2、幅6.1cm、厚4.9cm。

大型部材としては、柱穴から柱根や礎板21点が出土した。SB6990の南西柱穴からは8枚の材を組み合わせた礎板が出土している(図250)。これらは、長さ37～54cm、幅7～18cm、厚さ約1cmの材であり、板目材と柁目材とが混在する。特に、柁目材は片面に刀子によるとみられる加工痕跡が明瞭に残る。接合検討の結果、2枚、3枚、3枚の3個体に接合した。(浦)

SB6990南西柱穴出土礎板の年輪年代測定

SB6990南西柱穴の礎板は8枚あり、上から順に1～8の番号を振っている。このうち、標準年輪曲線¹⁾と照合するのは柁目板の1、3、4の3点で、これらは年輪曲線が酷似することから同一材と考えられる(図251)。1がもっとも新しく、713年+1層の早材があり、辺材23mm・62層分が残存しているため、伐採年代は714年以降、それほど経たない年代である。(星野安治)

東西棟建物SB6994の再検討

第279次では東妻が、第282-16次では西妻が検出されており、これらの柱筋は坪の南北中軸で対称となる。そのため、桁行15間の東西棟掘立柱建物(SB6994)が想定され、本調査区でもその検出が見込まれた。しかしながら、想定される柱穴列のライン上には同一規模の柱穴は並ばず、両調査区で検出したSB6994は一棟の建物ではないことが判明した。柱穴列周辺は整地土が削平されており、洪水砂と考えられる明黄褐色粗砂が平面的に露出している状態であり、柱穴を見落とす可能性は著しく低い。

これらの建物が坪の南北中軸で対称であることを前提にすると、第279次では西の妻柱が検出されておらず、本調査区でも検出しなかったことを勘案すると桁行5間と考えられる。さらに、調査区西壁で検出した柱穴列が第282-16次調査で検出した西妻に対応する東妻に

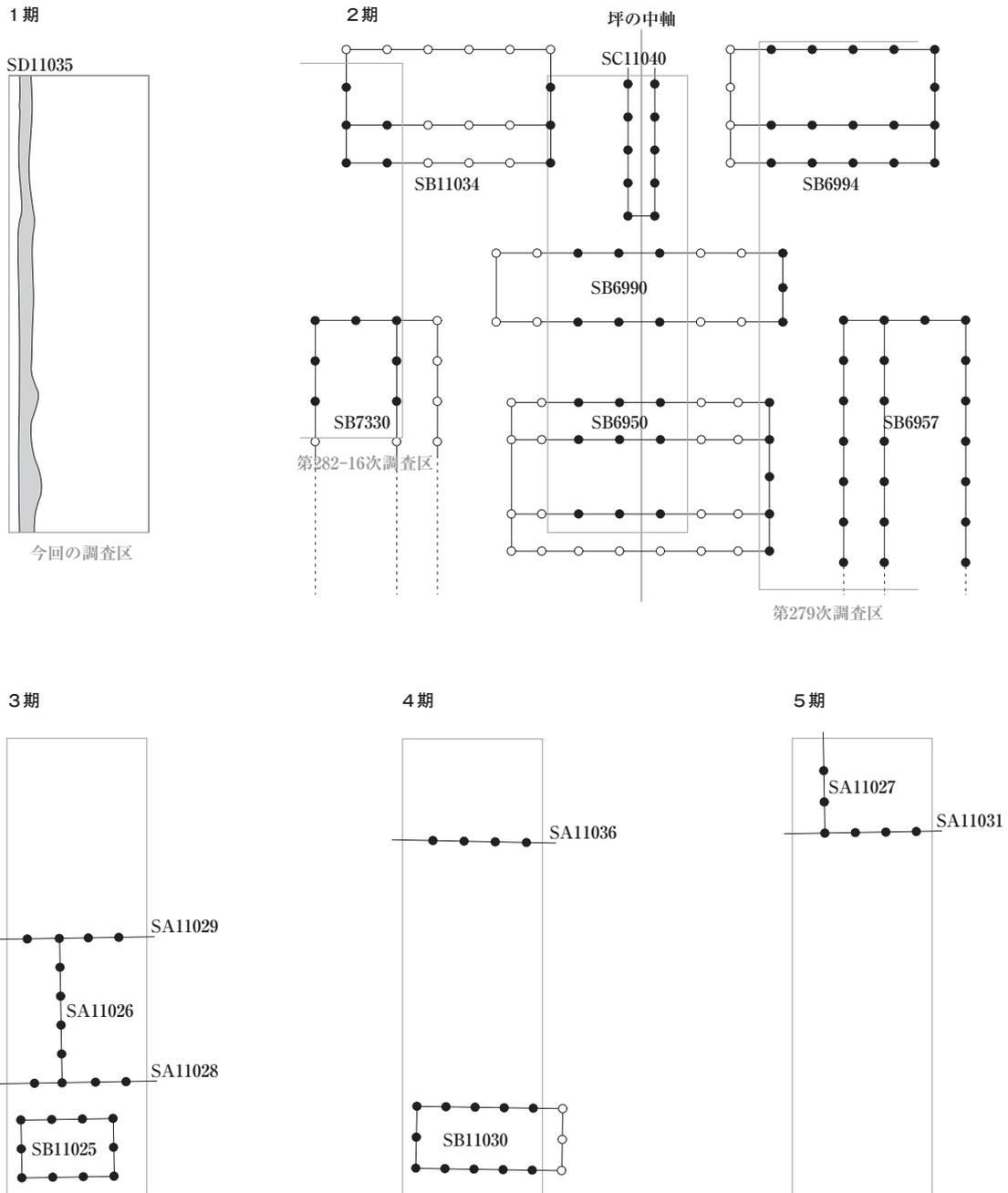


図252 第563次調査遺構変遷図

あたり、桁行5間、梁行2間の南廂付東西棟建物2棟 (SB6994・SB11034) が東西に並立すると考える。

遺構変遷

今回の調査で検出した各遺構の変遷を整理する(図252)。

1期(整地以前)

調査区の西部を南北素掘溝SD11035が北から南に流れ

る。東に位置する第279次調査区において、A期の遺構として南北素掘溝SD6996を、第282-16次調査区では南北素掘溝SD7331を検出している。このうちSD6996は幅1.1~1.9m、深さ0.5~0.7mと規模は大きいものの、逆台形の断面形状を呈していることなどから、SD11035も同時期の遺構と考える。

2期（奈良時代前半頃）

2棟の大型東西棟建物SB6950・SB6990が南北に建ち並び、北方に単廊SC11040が建ち、その西には、南廂付東西棟建物SB11034が建つ。SB6950・SB6990は、ともに柱抜取穴からⅡ-1期（721~729）の瓦が出土し、SB6990は714年からそれほど経ない時期に伐採された板材を礎板に用いており、720年代に建てられたものと見て良いだろう。

周辺の調査では、2棟の大型東西棟建物SB6950・SB6990の東西に西廂付南北棟建物SB6957および東廂付南北棟建物SB7330が、またSC11040を挟んで東西に南廂付東西棟建物SB6994およびSB11034が配置される。SB6994のほぼ同位置には、東西棟建物SB6993が先行して建つ。SB7330の柱抜取穴からはⅡ-1期の軒丸瓦が、SB6957からは天平宝字6年（762）の紀年銘を持つ荷札が出土した土坑SK6955と重複し、これよりも古い。SB6957・SB7330もSB6950・SB6990と同時期の遺構とみてよいだろう。

またSB6993の柱掘方からは、平城宮土器Ⅱの土師器杯Aが出土しており、SB6950・SB6990・SB6957・SB7330と同時期に建てられたものの、その後、建物群の中軸に東西対称に配置し、南廂を付けたSB6994・SB11034に建て替えられたものと考えられる。ただし、第282-16次調査ではSB6993に対応する建物を検出していない。となると、SB6993は坪の南北中軸を基準にしておらず、前時期の建物の可能性も考えられる。

3期（奈良時代後半）

調査区の南部に東西棟建物SB11025が建ち、その北に2条の東西塀SA11028・SA11029と両者を繋ぐ南北塀SA11026を設ける。SB11025の柱掘方からは奈良時代の須恵器が出土した。いずれも、造営方位は北で西にふれる。

4期（奈良時代後半）

調査区の南部に東西棟建物SB11030を、北部に東西塀SA11036を設ける。いずれも、造営方位は東で南にふれる。SB11030の柱抜取穴からは、Ⅱ-2期の軒平瓦が出土した。

5期（奈良時代後半）

前述のSA11036のほぼ同位置に、東西塀SA11031が建ち、南北塀SA11027の南端がこれに接続する。造営方位

は北で西にふれており、3期と同様の傾向を持つ。

東に位置する第279次調査区においても、北で西にふれる造営方位を持つ建物としてSB6981・SB6954・SA6969を検出し、E期としている。本調査区の3・5期は同様の傾向を示しており、3~5期は、第279次E期に対応するものと考えられる。（鈴木智大・浦）

まとめ

本調査では、平城第279次調査で一部検出した奈良時代の掘立柱建物（正殿SB6950、後殿SB6990）の西の続きを確認した。一方で、第279次調査と第282-16次調査で確認した後殿SB6994については、桁行15間の東西棟掘立柱建物が想定されていたものの、本調査区においては想定位置に柱穴が並ばないことから、従来の想定規模よりも小さく、2棟になると考えられる（SB6994・SB11034）。調査区西辺では、整地土（黒褐色砂質土）下から南北溝SD11035を検出した。この南北溝SD11035がもっとも古い遺構であり、この状況は第279次調査区と類似する。これらの溝は、整地が施される前の、十一坪を区画していた溝とも考えられる。おおよその時期変遷は、①南北溝SD11035の掘削、②全面的な整地、③正殿SB6950・後殿6990の建築、④北で西にふれるSB11025や塀など、そして⑤SB11030の建築という順で少なくとも5時期に及ぶ。

また、既往の調査で想定された正殿、後殿の建物に続く柱穴を検出し、改めて大型建物群の存在を確認した。特に後殿SB6990は直径約32cmの柱を持つ。また、これらの大型建物群の建築は、柱掘方から出土した礎板の年輪年代や土器の年代などから勘案すると、720年頃からあまり時間をおかずにはじめられたと想定でき、奈良時代の早い段階で建てられたと考えられる。

また、本調査では漆附着土器、転用硯、施釉瓦など特殊遺物の出土が多い。さらに左京二条二坊十一坪は南の十二坪の建物群とその中軸が一致しており、口の字、もしくはコの字型の建物配置となっていることが想定されている。このように、出土遺物や建物配置からも平城宮東院南東にあたる左京二条二坊十一坪の重要性をうかがうことができる。（浦）

2 第571次調査

はじめに

本調査は、共同住宅建設にともなうものである。調査地は、左京二条二坊十一坪の西北隅付近で、史跡阿弥陀浄土院跡南辺と二条条間路を挟んで向かい合う位置にあたる。周辺調査では、第281次調査で二条条間路の北側溝を十一坪南辺に沿って一坪分検出しており、その東端の十坪・十五坪の境界南辺では門とみられる遺構を検出している。また、二条条間路の南側溝を約12m分検出した（『年報 1998-Ⅲ』）。第533次調査では、十一坪内で奈良時代前半の建物跡が多数検出された（『紀要 2016』）。

今回の調査は第281次調査の二条条間路南側溝検出部分の東に接する地点に位置する。調査は2016年5月16日から6月21日までで、東西7m、南北12mの84㎡の調査区を設定した。

基本層序

基本層序は、現地表から造成土（約60cm）、耕作土（約20cm）、床土（35～40cm）、褐灰色シルト（5～10cm）、黒褐色シルト（5～10cm）、黒灰色シルト（20～30cm）、青灰色粗砂（地山）である。遺構検出は黒灰色シルトおよび青灰色粗砂上面でおこなった。検出面は標高60.3～60.5m付近で、北から南へ傾斜している。褐灰色シルトは奈良時代の遺物を多数含むのに対し、黒褐色シルトおよび黒灰色シルトは遺物をほとんど含まない。後者は東西溝SD7100以外のすべての範囲に一面に広がり、整地土と考えられる。

検出遺構

検出した遺構は東西溝2条 南北溝2条 柱穴10基である（図257）。すべて奈良時代とみられ、切り合い関係から上層と下層に分かれる。上層遺構は黒灰色シルト上面で検出し、下層遺構は黒灰色シルトを除去した後で、青灰色粗砂上面で検出した。

①下層遺構

東西溝SD7100A 二条条間路南側溝。幅3m以上、深さ0.9m以上である。南肩は上層のSD7100Bよりも北へ0.6mずれている。溝が南へずれたのか幅が狭まったのかは、北肩を検出していないため不明である。調査区西南隅の溝の立ち上がりから切株が検出された。溝埋土層中位の粘質土層から木製品、瓦、土器等遺物が多く出土



図253 第571次調査区全景（南から）



図254 東西溝SD7100完掘状況（北西から）



図255 南北溝SD11113・11114完掘状況（北東から）

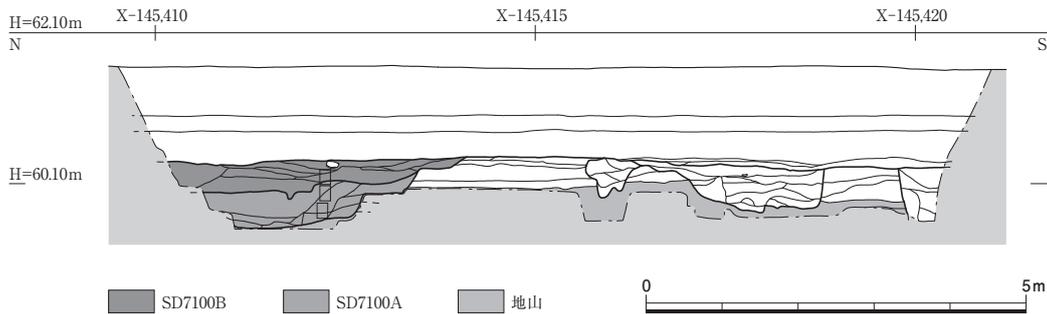


図256 第571次調査東壁土層図 1 : 100

し、底面付近の粗砂層から木簡および削屑が出土した。

なお溝の南側では地山が約3mの幅で高く残され、この範囲は、第281次調査の築地SA7101の延長上に位置する。

南北溝SD11113 幅約0.3m、深さ約0.2mの南北溝。南北約7m分を検出した。ほぼ直線状に掘り込まれ、東西溝SD7100Aに接続する。築地SA7101の延長上の地山の高い範囲より南側は、0.2~0.3m低くなっている。溝底面のレベルは、北から南へと傾斜する。南北溝SD11114よりも古い。

南北溝SD11114 幅0.7~1.3m、深さ0.2mの南北溝。南北約7m分を検出した。東西溝SD7100Aに接続する。北半部は東へ曲がっている。築地SA7101の延長上の地山の高い範囲より南側では、底面が0.2~0.3m低くなり、幅が0.4~0.5m広がる。南北溝SD11113と同様に、溝底面のレベルは、北から南へと傾斜する。南北溝SD11113よりも新しい。均質な粘質土で埋戻されている。

柱穴SP11115 掘立柱の柱穴で、東西0.6m以上、南北約0.8m、深さ約0.9m。直径0.25m、長さ0.9mの柱根を検出した。柱根は断面八角形に加工されていた。

柱穴SP11116 単独の柱穴。東西約0.5m、南北約0.4m、深さ約0.9m。底面で直径約0.2mの柱痕跡が検出された。SP11115と比べると掘方は小さいが、柱の規模は類似する。

②上層遺構

東西溝SD7100B 二条条間路南側溝。幅3.8m以上、深さ0.4~0.5m。溝の北肩は調査区外となり、検出できていない。底面の標高は約58.3~58.4mで、東から西へ傾斜している。

柱穴SP11111 掘立柱の柱穴で、南北約0.9m、深さ約0.6m。抜取穴から木簡を含む木製品が多く出土した。

柱穴SP11112 掘立柱の柱穴で、南北約0.9m、東西0.7

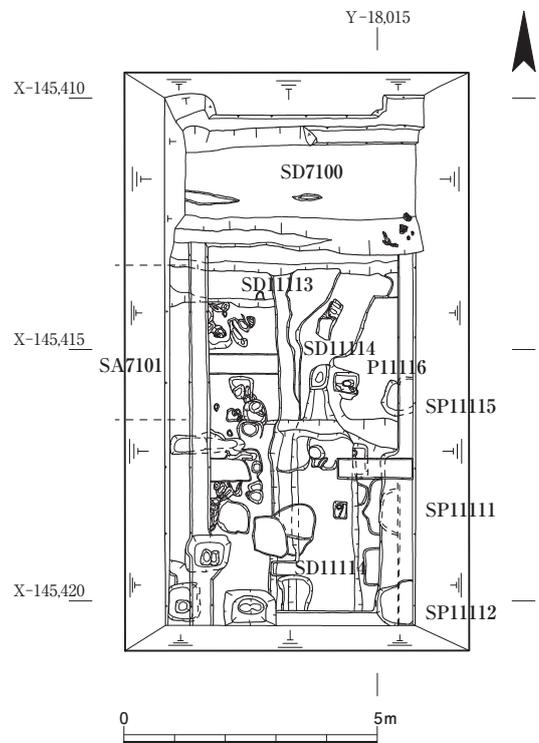


図257 第571次調査遺構図 1 : 150

m以上、深さ約0.8m。抜取穴から木製品が多数出土した。SP11111と同規模で南北に並び、抜取穴に木製品を多く含む点からも、一連の建物の柱穴の可能性もある。

(国武貞克)

出土遺物

土器・土製品 本調査では整理用コンテナ12箱分の土器・土製品が出土した。奈良時代の土師器・須恵器がほとんどを占め、ほかに古墳時代の円筒埴輪片が少量混じる。ここでは、SD7100A・B、SD11113、SD11114からの出土土器・陶硯を図示した(図258)。

SD7100A・Bからは、土師器杯A・B・C、椀C、皿A・B、皿B蓋、高杯A、甕A・Bが出土し、b0・c0

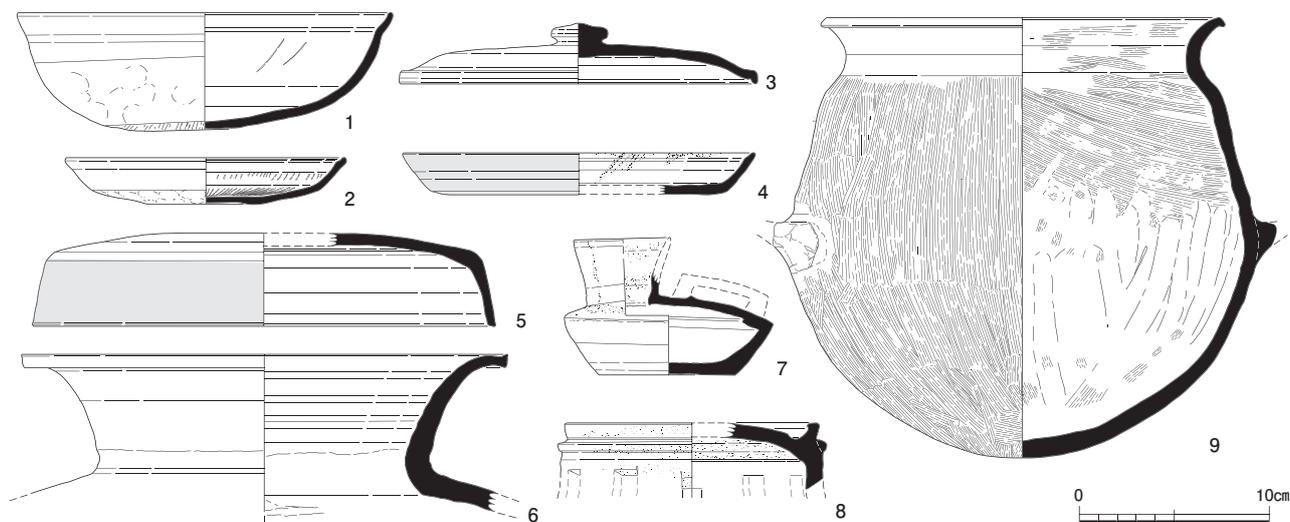


図258 第571次調査出土土器・土製品 1 : 4

手法による杯Aが比較的顕著である。

1は土師器杯A。口径19.8cm。SD7100B出土。器高が高い2は土師器皿A。胎土は精良であり、内面には一段斜放射暗文を施す。口径14.8cm。須恵器は、杯A・B、杯B蓋、椀A・B、皿B、皿B蓋、壺A蓋、平瓶、水瓶、甕A・Cが出土し、杯Bおよび杯B蓋が多い。SD7100B出土。7は須恵器平瓶。小型のほぼ完形品である。胴部最大径11.0cm、口径5.3cm。これら土器群は平城宮土器Ⅱ～Ⅲに位置づけられる。SD7100A出土。

SD11113からは、土師器杯A・C、杯B蓋、椀C、皿A・C、高杯A、甕A・B、竈が出土し、b0・c0手法による杯Aが目立つ。須恵器は、杯A・B、杯B蓋、皿A・B・C、皿B蓋、鉢B、平瓶、壺L・N、甕A・Cが出土し、杯Bおよび杯B蓋が多い。3は須恵器杯B蓋。内面全体に墨痕がみられ、転用硯と考えられる。口径19.0cm。4は須恵器皿C。口縁端部に明瞭ではないが面を持つ。口径18.6cm、器高2.3cm。5は大型の須恵器壺A蓋。頂部に火襷がみられる。口径24.4cm。6は須恵器甕。口径25.6cm。以上から平城宮土器Ⅱ～Ⅲに属すると考えられる。SD11113からは圈足円面硯(8)も出土した。硯部から脚部上端までの破片であり、硯面の摩耗はみられるが墨痕はない。外堤部外面と硯部内面への降灰から倒置焼成と考えられる。外堤径13.4cm、硯面径10cm。

なお、SD11114からは土師器甕Bが出土した(9)。胴部中程に取りつく把手の残存基部はしっかりしたつくりである。口径21.1cm。以上から、同溝は奈良時代前半に属すると思われる。

上記のほか、主にSD7100A・B、SD11113から圈足円

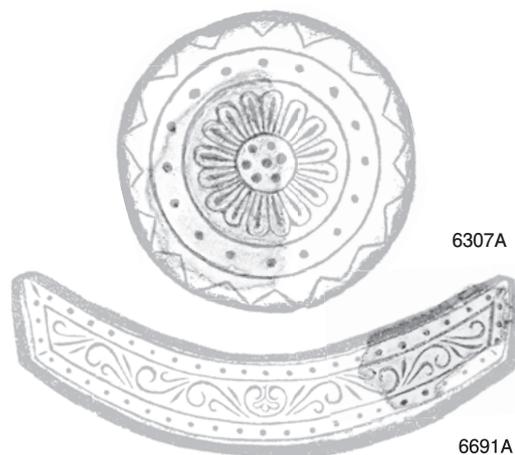


図259 第571次調査出土軒瓦

表42 571次調査出土土瓦磚類一覧

軒丸瓦		軒平瓦			その他		
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数
6307	A	1	6644	A	1	平瓦(緑釉)	7
型式不明(奈良)		5	6664	D	1		
			6691	A	2		
軒丸瓦計		6	軒平瓦計		4	その他計	7
丸瓦			平瓦			磚	
重量		17.327kg			48.061kg		0.036kg
点数		152			1012		1

面硯(脚柱部小片1点)、転用硯、墨書土器、製塩土器、ミニチュア土器が出土したが、とくに転用硯が顕著である。なお、墨書土器のうち判読できたものは1点のみで、「□厨」と記されている。(山藤正敏)

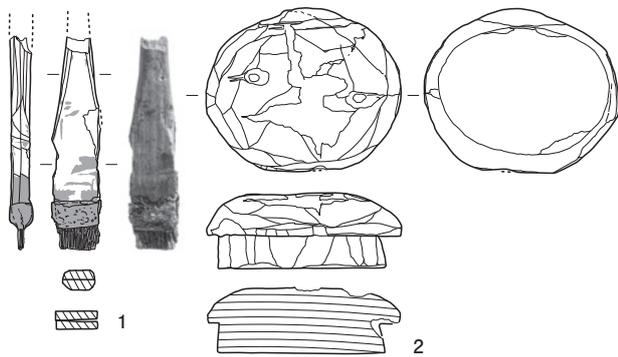


図260 第571次調査出土木製品 1:2

瓦磚類 本調査区の出土瓦の点数は表42の通りである。SD11113から6307A、6644A、SD7100Aから6691Aが出土した。扁行唐草文の6644Aは第Ⅰ期前半、6307A、6691A(図259)は第Ⅱ期後半の所産。SD7100A・SD11113からは緑釉平瓦6点が集中的に出土していることも特筆される。(岩戸晶子)

木製品 図260の1は漆刷毛。長さ5.6cm、幅1.2cm、厚さ0.4cm。板状の棒を割き長さ2cmの毛を挟み込み巻きつけ穂先とする。柄は面取りされ毛先は切り揃える。下半部に漆が付着。2は栓。長径5.2cm、短径4.4cm、厚さ2cm。上面に直径0.4~0.6cmの孔が2カ所みられる。ともにSD7100Aから出土。(国武)

木簡 計477点(うち削屑404点)が出土した。遺構別の内訳は、二条条間路南側溝SD7100から467点(うち削屑400点)、柱穴SP11111(抜取)から8点(うち削屑4点)、柱穴SP11112(抜取)から1点(削屑なし)、出土遺構不明1点(削屑なし)となる。また、二条条間路南側溝SD7100出土分については、下層のSD7100Aからの出土236点(うち削屑207点)、上層のSD7100Bからの出土222点(うち削屑193点)に細分され、他にA・Bいずれか不明なものが9点(削屑なし)ある。主要なもの14点を報告する(図261・262)。

1~7は、二条条間路南側溝SD7100Aからの出土。

1は白米の荷札。里制下(701~717)の木簡とみられ、特に里名が3文字で表記されることから、和銅6年(713)のいわゆる好字令(『続日本紀』同年5月甲子〔2日〕条)発布以前に遡る可能性がある。『和名類聚抄』によれば参河国額田郡に麻津郷があり、「麻生津里」はこれにあたるか。裏面も同筆とみられ、詳細不明だが、あるいは荷物の運搬に関わる記載か。

2~4は同一簡とみられるが、直接には接続しない。養老2年(718)に安房国が上総国から分置される以前に送られたアワビの荷札の断片。「安房」の表記は分立以

後に定着するもので、それ以前は「阿波」などが一般的であった(『平城木簡概報12』10頁上段(48)など)。「阿幡」は3例目となる(他はa『平城宮木簡二』2290号、およびb『平城木簡概報27』18頁下段(248))。これまでは「幡」を「幡」の異体字とみて、a・bでは「阿幡」と表記してきた。しかし、地名の表記が固まるまでの変遷を考える上で重要な事例となるため、今後はa・bも含め、原表記に従い「阿幡」と表記することとする。

5は習書木簡か。裏面3文字目は1・2文字目と同じ「陋」とみて残画に矛盾はない。

6・7は削屑。7は「殿」への人員配置の記録簡などに由来するものか。

8~13は、二条条間路南側溝SD7100Bからの出土。

8は伊勢国(朝明郡か)からの荷札木簡の断片。裏面3文字目は「葛」「節」などの可能性がある。

9も荷札木簡の断片か。「田比」はタイ(鯛)のこと。腊は干物。二条大路木簡中に、志摩国答志郡から送られたタイの荒腊の荷札の一群がある。荒腊は未詳だが、単に「鯛腊」と記す荷札の存在(『平城木簡概報22』34頁下段(350)など)やカツオの例(「荒(鹿)堅魚」と「煮堅魚」)などを参照すれば、加工の工程が比較的単純でやや廉価な干物を指すか。

10は文書木簡を何らかの製品に二次的に転用したものである可能性がある。

11~13は削屑。11は、本調査出土木簡では唯一の紀年銘資料となる。神亀4年は727年。

14は柱穴SP11111(抜取)からの出土。調塩の荷札とみられるが、全体に墨痕は薄く、肉眼では釈読困難である。表面4文字目は「里」または「黒」か。

以上のように、二条条間路南側溝SD7100出土木簡のうち、年代が推察できるものは和銅3年(710)の平城遷都から神亀年間(724~729)頃までに集中する傾向があり、SD7100が奈良時代前半に属する遺構であることを示す。また、特に下層のSD7100A出土分に710年代に遡る可能性が高い資料(1および2~4)がみられ、上層のSD7100B出土分に720年代後半の年紀を記すもの(11)が含まれることは、SD7100の再掘削(つけ替え)の時期を絞り込む手がかりともなろう。ただし、内容面での顕著なまとまりは見出しがたく、廃棄元や資料群としての性格の特定は困難である。(山本祥隆)

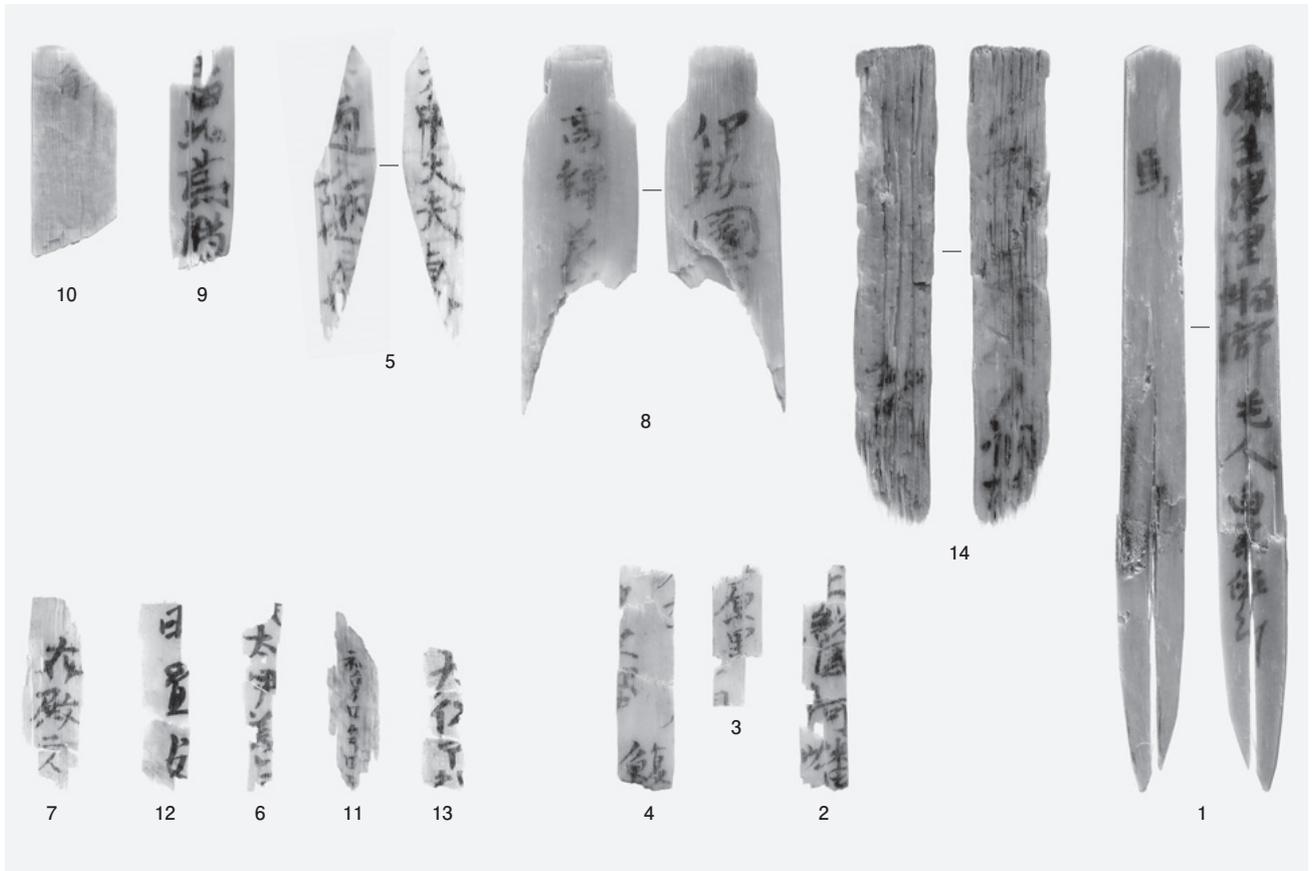
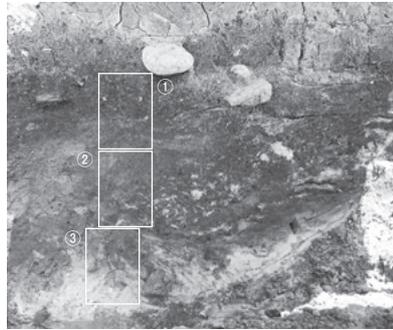


図261 第571次調査出土木簡赤外線写真 1 : 2

14	柱穴SP1111(抜取)出土	□御 □調塩	(127)・22・5 019
13	大伴部	□	091
12	日置安	□	091
11	神亀四年四	□ (月カ)	091
10	解申	□	(56)・22・3 065
9	田荒腊 (比カ)	□	(59)・15・2 081
8	伊勢国高 (朝カ)	□	(97)・30・3 039
7	殿二人 (大カ)	□	091
6	太伊美 (吉カ)	□	091
5	中大夫 (東カ)	□	(77)・17・1 081
4	留カ	□ 鯨	(60)・(15)・1 081
3	原里	□	(38)・(13)・1 081
2	上総国阿幡	□	(59)・(12)・1 081
1	麻生津里物部毛人白米伍斗馬	□	197・16・4 051

※2~4は同一簡の可能性が高い

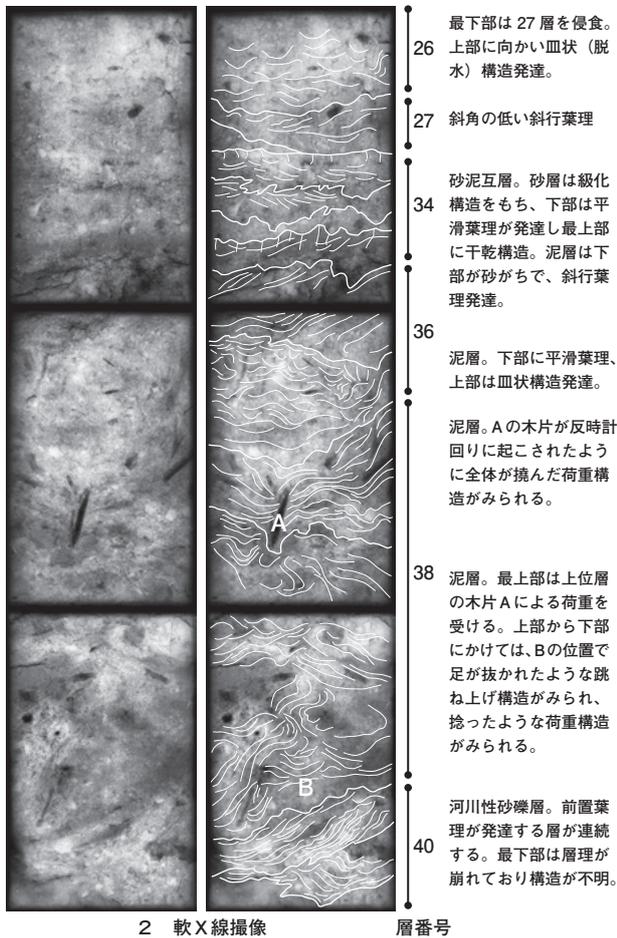
図262 第571次調査出土木簡積文



1 試料採取層位 (東壁)

試料

- ①: L1-①
- ②: L1-②
- ③: L1-③



2 軟X線撮像

層番号

最下部は27層を侵食。上部に向かい皿状(脱水)構造発達。

26

27 斜角の低い斜行葉理

砂泥互層。砂層は級化構造をもち、下部は平滑葉理が発達し最上部に干乾構造。泥層は下部が砂がちで、斜行葉理発達。

34

36 泥層。下部に平滑葉理、上部は皿状構造発達。

泥層。Aの木片が反時計回りに起こされたように全体が撓んだ荷重構造がみられる。

38 泥層。最上部は上位層の木片Aによる荷重を受ける。上部から下部にかけては、Bの位置で足が抜かれたような跳ね上げ構造がみられ、捻ったような荷重構造がみられる。

40 河川性砂礫層。前置葉理が発達する層が連続する。最下部は層理が崩れており構造が不明。

土壌分析

発掘調査の露頭観察の際、SD7100A・Bの全体に偽礫の堆積と複数の荷重痕が認められた。そこで堆積環境を検討するため、地質切出試料を採取し、軟X線撮像による堆積構造の観察をおこなった(図263)。その結果、SD7100A・Bの埋没は以下のような経緯を辿ったと考えられる。最初水流のあった水路(40層)は、沼沢地となり人為活動がおよび、足跡のようなものをはじめとする複数の荷重構造が見られるようになる。その後は、わずかに水位の増減を繰り返し、水位が下がった際には脱水して(26、34、36層下部)空堀となり、地表面は乾燥化していた(34層)と推定される。また、堆積構造による分層は、調査時のものと調和的であった。(村田泰輔)

まとめ

平城京左京二条二坊十一坪の北半は従来の調査で大規模な建物群の存在が知られていた。今回の調査ではその西北隅において二条条間路南側溝を検出した。南側溝をはじめ、検出した奈良時代の遺構は2時期に分かれる。

下層面では、南側溝の南側では基底幅約3mの築地の存在が想定され、その範囲を貫通して、坪内に向かって傾斜する南北溝を2条検出した。SD11113は築地SA7101の延長上の地山の高い範囲では直線であるため、暗渠の可能性も想定し得る。しかし、SD11114はそれよりも幅が広く、北半部は東へ曲がっているため、暗渠の可能性は想定しづらい。このため、奈良時代前半には今回調査区の範囲では築地で遮蔽されていなかった可能性も想定できる。

調査区西の隣接範囲を対象とした第281次調査では、築地SA7101の範囲においては柱穴を検出していないが、今回の調査区ではその延長上で、柱穴を2基検出した(SP11115・SP11116)。これらの柱穴は2条の南北溝とあわせて考えると、出入り口にもなる区画施設の可能性も考えることができる。南北溝SD11113・11114の機能は現状では確定できないが、上記のような区画施設や二条条間路南側溝から坪内への取水のための施設、あるいは両方の可能性が考えられる。(国武)

註

- 1) 奈文研『年輪に歴史を読む—日本における古年輪学の成立—』1990。